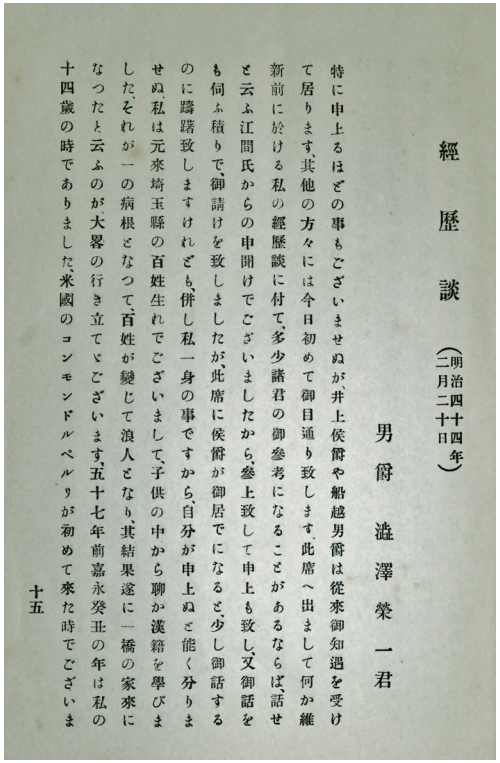
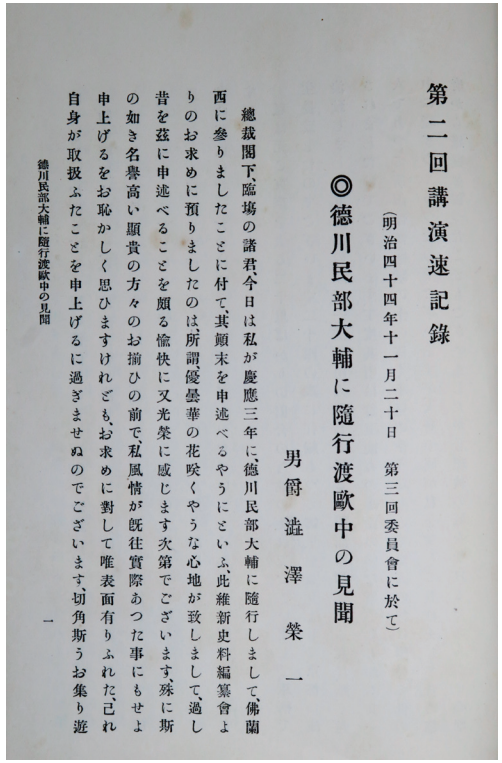
渋沢栄一



特に申上るほどの事もございませぬが、井上侯爵や船越男爵は從來御知遇を受けて居ります、其他の方々には今日初めて御目通り致します、此席へ出まして何か維新前に於ける私の經歷談に付て、多少諸君の御參考になることがあるならば、話せと云ふ江間氏からの申聞けでございましたから、參上致して申上も致し、又御話をも伺ふ積りで御請けを致しましたが、此席に侯爵が御居でになると、少し御話するのに躊躇致しますけれども、併し私一身の事ですから、自分が申上ぬと能く分りませぬ、私は元來埼玉縣の百姓生れでございまして、子供の中から聰か漢籍を學びましたが、それが一の病根となつて、百姓が嫌じて浪人となり、其結果遂に一橋の家來になつたと云ふのが大略の行き立てでございます、五十七年前嘉永癸丑の年は私の十四歲の時でありました、米國のコンモンドルペルリが初めて來た時でございま

經歷談（明治四十四年二月二十日）

男爵　澁澤榮一君



第二回講演速記錄

（明治四十四年十一月二十日　第三回委員會に於て）

◎徳川民部大輔に隨行渡歐中の見聞

男爵　澁澤榮一

總裁閣下、臨場の諸君、今日は私が慶應三年に、徳川民部大輔に隨行しまして、佛蘭西に參りましたことに付て、其顚末を申述べるやうにといふ、此維新史料編纂會よりのお求めに預りましたのは、所謂優曇華の花咲くやうな心地が致しまして、過し昔を茲に申述べることを頗る愉快に又光榮に感じます次第でございます、殊に斯の如き名譽高い顯貴の方々のお揃ひの前で、私風情が既往實際あつた事にもせよ申上げるをお恥かしく思ひますけれども、お求めに對して唯表面有りふれた、己れ自身が取扱ふたことを申上げるに過ぎませぬのでございます、切角斯うお集り遊

徳川民部大輔に隨行渡歐中の見聞

＊毛利家文庫76速記類56「温知会講演速記録」（15の1）

解　説

渋沢栄一（しぶさわ えいいち）は1840（天保11）年，現埼玉県深谷（ふかや）市の豪農に生まれ，尊皇攘夷・倒幕を志しましたが，京都での志士活動に行き詰まり，一橋慶喜に仕えることになりました。慶喜は1866（慶応2）年将軍となり，渋沢は翌年のパリ万国博覧会に将軍の名代として出席する慶喜の異母弟・徳川昭武の随員として渡仏し，同時にヨーロッパ各国を訪問してグローバルな見聞を広めました。

維新後，1873（明治6）年には大久保利通や大隈重信と対立して大蔵省を井上馨と共に退官，以後は実業家として第一国立銀行や東京証券取引所のほかガス・保険・ホテル・鉄道・ビール等多種多様な企業の設立・経営に関わり，また社会活動家として東京慈恵会・日本赤十字社の設立などに携わりました。実業教育や女子教育にも力を入れ，多くの大学の設立・経営にも関わりました。

写真は，渋沢が幕末期に洋行したときの様子（右）や自らの経歴（左）を語った講演の速記録です。

＊渋沢栄一と井上馨が，大蔵省を去った直後に出した政府への建言書は新聞に掲載されて一般に流布したことから，事態を憂慮した政府は7月，掲示をもってそれに対抗しました（「前大蔵大輔井上馨同三等出仕渋沢栄一建言書新聞中へ記載ニ関シ掲示」県史編纂所史料2118）。

山口県文書館所蔵アーカイブズガイド学校教育編
目次に戻る